書評

Robin Jeshion (Ed.), *New Essays on Singular Thought.* Oxford University Press, 2010.

大川祐矢

1.　はじめに

本書は、言語哲学や心の哲学、そして知覚の哲学などの分野に跨って昨今重要なトピックとなりつつある「個別的思考singular thought」(1)についての新たな論文十篇を所収した論文集である。今回はその中でも言語哲学の分野で活躍するKent BachとFrançois Recanatiによって書かれた論文を取りあげ、現代言語哲学の観点から個別的思考がどのように論及されうるのかについて、その知見を得ることを目的とする。まずこの節では、本書の編者であるRobyn Jeshionによって書かれた“Introduction”（本書pp. 1-35）を参考にして、この個別的思考なるものについて簡単な特徴付けを施し、同時にこれまでどのような議論がなされてきたのか、および何が問題とされているのかを確認する。

1.1　個別的思考と記述的思考—その特徴と源泉

いま私が自宅の庭で、たくさんの猫たちに囲まれて日向ぼっこをしているとしよう。これらの猫たちについて、私は次のような二通りの仕方で思考することが出来る。

一つ目の仕方は、*the smallest cat in this garden is lovely* と考えることで、特定の猫の可愛さについて考える仕方である。このような私の思考は記述的な状況 *the smallest cat in this garden* を充足するために、特定の猫についての思考となっている。この場合、私は記述によって、純粋に概念的に彼らについて考えていると言えるだろう。もう一つの仕方は、目でその猫を見て、*that is lovely* と考える仕方である。この場合、*that* は私が注意を払っているまさにその猫を、対象として直示的に指示している。かなり大雑把な説明ではあるが、前者のタイプの思考は記述的なもの、後者のタイプの思考は個別的なものとして特徴づけることが出来る。

このようにして特徴づけられる個別的思考についての現代の研究は、その多くを Frege と Russell のアイディアに負っている。まずは Russell から見ていこう。Russell は命題につ

いて、現在しばしば一般的 general・個別的と呼ばれている二種類の命題があると考えていた。そのどちらもが、構造的で真理判断可能なものとされるが、それらはその内容において異なっていると考えられた。まず個別的命題についてだが、それは構成要素として個体や性質を持つという意味で、世界内の個体についての命題である。対照的に一般的命題は、そのような個体を構成要素として持つのではなく、あくまでそれらについての概念的な内容を持つものとされる。われわれがそう考えているように、Russell もまた、思考の内容とは命題であり、個別的思考に個別的命題が、記述的思考に一般的命題がそれぞれ対応すると考えていたのである。しかし、この分析のみでは、われわれがいかにして一般的・個別的な命題を把握するのか、またそのように言える状況が分からない。そのような疑問に対して Russell は、「見知り acquaintance」こそがその方法であり、また条件であると考えた。この「見知り」という考え方がいかなるものであったかは Bach および Recanati の節で詳しく述べるが、いずれにせよ Russell は、思考内容には個別的・記述的という二側面があるという考えを擁護していたと言って良いだろう。

一方、FregeはそのようなRussellの考えとは異なり、思考内容は全て記述的であるという主張を行った。彼によれば、個別的命題なるものは存在しえないという。この見解は彼の意味sense／指示reference(2)の区別に由来するもので、この区別によると「アリストテレス」という固有名詞はアリストテレスその人を指示対象として持ち、一方で「古代の最後の偉大な哲学者」という概念的な状態をその意味として持つことになる(3)。このような区別を導入するメリットは、例えば「明けの明星」や「宵の明星」のように、それが指示している対象は同じでありながらも、何か違うことを表しているような表現の分析を首尾よく行えるという点にある。この例で言えば、どちらの表現も指示は同じだが、意味が異なるために、別の概念的状況を表しているのだ、と分析できる。Fregeはこのような固有名詞のみでなく、確定記述や指示詞、そして文脈依存指示語にもまた、意味／指示の区別は妥当なものであると考えていた。加えて、同じ対象を指示する単語についてわれわれがしばしば抱く認識上の相違を説明するために、文によって表現された命題に対してそれらは指示ではなく意味を与えると仮定した。そのためFregeにとってあらゆる命題は、指示対象をその構成要素として持つような個別的なものではなく、概念的状況をその構成要素として持つような一般的なものであるとされたのだ。それゆえ思考も記述的なものに限られることになる。

1.2　個別的思考がなぜ問題となるのか

では次に、現代においてなぜ個別的思考が問題とされるのかを確認しよう。主要な原因

は、Frege が支持するような、あらゆる思考は記述的である、というテーゼが妥当性に欠けることにある。ある対象について思考する際、われわれは本当にその都度記述的に考えているのだろうか。先の猫の例を挙げれば、私はある猫の可愛さについて考える際、その猫が他の猫よりも小さいとか、しかじかの毛色をしているとか、しかじかの鳴き方をするとか、いちいちそのようなことを考えているのだろうか。直観的に言えば、むしろ、そのようなことを考えるのは、まさに目の前にいる当の猫の可愛さについて考えてから後の段階においてではないだろうか。いずれにせよ思考を記述的なものに限定してしまう Frege 的な考え方は、われわれの直観と合致したものであるとは言い難い。そのように考える人々が個別的思考を擁護する議論を展開しようとするのは自然な成り行きであろう。

しかし、個別的思考を擁護する際に避けては通れない困難があることもまた事実である。それは、個別的思考とはいかにして把握されるのか、という根本的な部分に関わる困難である。個別的思考を把握する方法が、仮に Russell がそう主張したように、個体へのわれわれの見知りによるものとしよう。その場合、個別的思考は必然的に対象依存的なものとならざるを得ないだろう。しかし、一見個別的思考に思えるような（少なくとも記述的でないような）、空虚な名前（例えばフィクションの登場人物）や幻覚に対する思考のように、その対象となるものが現実に存在していない思考はどう扱うべきなのか。さらに、「見知り」という見解自体にも困難が内包されている。というのも、よく知られているように、Russell はわれわれが見知ることが出来るのは、それを見知ることが疑いなく可能とされているもの、すなわちセンスデータのみである、と主張したからだ。そうなると、個別的思考が関わるのはセンスデータのみであることになり、その他の思考は全て記述的であることになってしまう。これでは Frege の考え方とほとんど変わらない。個別的思考を擁護しようとする論者はこれらの困難に対処する必要がある。

以下で紹介する Bach と Recanati もまた、個別的思考を擁護するという立場に立って、これらの問題へのアプローチを試みている。特に Bach は前者、Recanati は後者の問題により深く関わった議論を展開している。それでは内容に入っていこう。

2. Kent Bach, ‘Getting a Thing into a Thought’ （本書 pp. 39-63）

Bach は思考と言語についての議論の歴史的展開を概観することで、個別的思考に関する議論の現代的な位置づけを見定める。彼はまず Russell の命題観を素描することから始め、次に信念報告に関する *de re/de dicto* 区別から個別的思考を論じる仕方について検討する。そして第三に、あらゆる思考を記述的な思考へと還元するという試みの妥当性について論じ、最終的に、信念報告や記述的思考への還元という観点から個別的思考を理解しようと

いう方法は断念すべきだと結論する。

2.1 Russell の命題観

Russell によれば、ある命題を理解するためには、その命題の構成要素となる対象全てを見知ることが必要だという。そして見知ることが可能なのは、それについての知覚が誤りえない（それが幻覚や幻想でないことが確実であるような）ものに限られる。つまり、通常の意味での対象は、たとえ知覚していたとしてもそれについて誤りうるために、見知りの対象とはなりえないのだ。最終的に見知りの対象として残されるものは、あるものを知覚した際に感じる「～という感じ」というセンスデータのみに限られることになる。

このような見知り観の下では、あらゆる命題についての理解は、その構成要素が全てセンスデータのみで構成されるまで分析することによって把握される。つまり、個別命題を含めたすべての命題は、記述的に理解されるのである。

Bach は Russell のこのような命題観は必ずしも正しいものとは言えないものの、次の四つの一般的な考えと綺麗に結びついたものであると考える（本書 p. 43）。

- 命題、少なくとも構造的な命題（しばしば Russell 的命題と呼ばれる）は、個別命題と一般命題の二つに分けられる
- 固有名詞は、個体定項が一階述語論理で果たすのと同じ意味論的役割を果たす
- 対象についての事象的*de re*[(4)]態度を持つことは、対象に対してある種の直接的で、非媒介的な関係に立つことである
- 事象的態度の内容は個別命題である

後二者で事象的態度なるものが突然姿を現しているが、Bach の批判は三番目の見解に主として向けられる。ひとまず、次節でこの事象的態度なるものについての Bach の説明を見てみよう。

2.2 事象的態度と事象的態度報告

事象的／言表的 *de dicto* という区別は、一般的には様相に対してなされる区別をさす。それを態度の区別に持ち込んだのが、事象的態度／言表的態度という区別である。さらにそれを報告の区別へと放り込んだのが、事象的態度報告／言表的態度報告という区別である。Bach によると、様相から態度への拡張も良くないが、それをさらに報告へと拡張するのはなお悪いという。

様相の区別から態度の区別への拡張によって、事象的態度というのは、なにか対象に対して直接的で、非媒介的な関係を持つことであるという印象を与えてしまうだろう。しかし、あるものについて思考するとき、われわれが物質的な対象に対して持つ関係というのはそのようなものでは全くない。実際、われわれは同一のものに対して、矛盾した信念を抱くことが出来る。例えば、p であると信じていながら p でないと信じている場合などである。つまり、様相についての事象的／言表的区別と、態度についての事象的／言表的区別は、前者から後者への単なる拡張となっているわけではないのだ。

さらに、態度の区別から報告の区別への拡張は、特にそれが統語論的な区別であると考えられた場合、より厄介なことになる。例えば、ある信念についての事象的態度報告は「A は o（特定の対象）について、それが F であると信じている」とされる。一方、言表的態度報告は「A は S であると信じている」というものである。ある信念は、このどちらの仕方の態度報告で表わすのが適切であるかによって、事象的か言表的であるかが決定されるのである。しかし、これは誤っている。というのも、ある信念というのは、このどちらの仕方でも表現しうるものがほとんどだからだ。例えば、いま目の前に一匹の猫がいるとして、その猫に対して私が抱く信念について、「私はこの猫について隣の家の猫であると信じている」と事象的態度報告をしたとしよう。しかしこれは「私は目の前の猫が隣の家の猫であると信じている」という言表的態度報告に容易に言い換えることが可能なのである。つまり、態度報告の形式が、表現されている態度の内容を決定することはないのだ。

以上のことから導出される結論は、事象的／言表的区別と言うとき、それが様相についての区別なのか、態度についての区別なのか、それとも態度報告についての区別なのかによって、それが意味するところを峻別する必要があるということである。それを踏まえた上で、Bach は個別的思考を特徴づけるのは、その思考が非媒介的であることではなくて、事象的表象であることと考えた。次節でその議論を確認しよう。

2.3　事象的表象という考え方

先にも述べたように、事象的態度は端的にある対象と非媒介的な関係を持つことではない。事象的態度には媒介・非媒介的な関係の両方が含まれうる。よって事象的に考えることと言表的に考えることとの対比は、媒介的／非媒介的という対比ではなく、ある対象について事象的に思考しているか、ある記述の下でそれに“ついて”(5)考えているかの対比と読み換えるのが適切であろう。そしてその対比は個別的思考と記述的思考の対比と合致したものとなるのである。

では、事象的に考えるとはいかなることであるのか。それは、思考する対象と表象的に

つながっていることであるとBachは主張する。つまり、思考者はある対象について関係的に思考するということであり、ある記述の下で思考する場合のように、それについて充足的に思考する、つまり、対象の記述的状況を充足する命題をその内容として持つということではないのだ。思考対象は、まさに思考そのものとつながっているのである。故に、個別的思考とは、本質的に文脈依存的なものと言えるだろう。そこにおいて、事象的表象は、心的な文脈依存指示表現として働く。

個別的思考についてこのように考えると、思考と表象の間には、その距離や媒介の数がどうであれ、表象的なつながりがあるはずである。心的対象の事象的表象は、思考者の直接的な知覚のみならず、他者とのコミュニケーションや、単に読んだり聞いたりすることでも獲得され得る。そのそれぞれについて、われわれは個別的思考を抱くことが可能なのである。個体について考えるために、均質的な特徴づけを行う記述によって、その個体を同定する必要はもはやない。つまるところ個別的思考は、Russell的な見知りによってのみ成り立つものではなく、このような事象的表象の連鎖の終焉に思考者が位置することにより可能となるものと言えるだろう。

Bachの結論を引いておこう（本書p. 61）。

> あることについて個別的思考を持つことは、それが誰であるかとか、何であるかを知っていることを要求しない。そうではなくて、それと表象的につながっていることを要求するのだ。記述的思考の“対象”とは異なり、個別的思考の対象は充足的にではなく、関係的に決定されるのだ。

2.4　考察

個別的思考を可能ならしめるものとして、最終的にBachは事象的表象関係という考え方を提示した。これは本人も言っているように（本書p. 57）、Russell的見知りのある種の拡張版である。この考え方はわれわれの直観に合致したものであると言えるだろう。実際、われわれは直接的に何かを知覚せずとも、それらについて個別的思考を抱くことが出来る。例えば、「昨日赤い首輪をつけた黒猫を見たよ」と言われた人が「それってうちで飼っている猫じゃない？」と考えることが可能なように。

とはいえこの考え方には未だ洗練の余地があることも確かである。これまた本人が言っているように（本書p. 58）、どこまでを事象的表象関係に含めるかははっきりしていない。例えば、コミュニケーションの文脈外であっても、誰かの名前を読むだけでその人について個別的思考を抱くことが可能なのだろうか。おそらく無理だと思われる。仮に何らかの

個別的思考を抱けたとしても、それはその名前の人ではなく、名前そのものを思考対象として持つようなものとなろう。その範囲を明示させなければ、下手をすると Russell とは真逆の意味で極端な見知り概念となってしまう危険性がある。いずれにせよ今後の展開が待たれる見解である。

3. François Recanati, 'Singular Thought: In Defence of Acquaintance' （本書 pp. 141-89）

Recanati は「見知り」の"愛好者"という立場から、個別的思考を擁護する議論を展開する。その際、個別的思考を擁護する立場（Singularism）と比べて、思考を記述的なものに限定する立場（Descriptivism）にはいくつか問題点があると主張する。さらに、それらの問題点を克服するべく Descirptivism を洗練させたとしても、Singularism の方がそれよりも優れた理論を提示できると主張する。さらに、Singularism に対してしばしばなされる「見知り」についての批判も、反論者たちはその標的を見誤っているという点から応答を試みる。

3.1 Russell の誤りと Frege の誤算

1.で確認したように、Russell は基本的には個別的思考と記述的思考の二種類を認める立場にある。しかし一方で、意味と指示という二つの意味論を採用する Frege に対し、指示のみを、すなわち対象への見知りのみをその意味として採用したのである。前節でも確認したように、結果的にそれは見知りをセンスデータのみに限定するというかなり極端な見解へとつながり、最終的に彼は Descriptivism に屈したも同然の状態になってしまった。

Recanati によると、彼の最大の誤りは、Frege の二段構えの意味論を否定したことにある。というのも、実際のところ Frege の二段構えの意味論は、Singularism にとって都合の良い見解であったからだ。そのことに気付かなかったために、Russell は見知りを奇妙に限定せざるを得なかったのである。

とはいえ、本当に Frege の意味論は Singularism にとって都合の良いものなのだろうか。仮にこれが正しかったとしたら、Singularist にとっては喜ばしいことであるが、Frege を含む Descriptivist たちにとっては致命的な誤算となろう。Recnati によれば、その誤算は次のようなものである。

実際のところFregeの意味論は、われわれの知識全ての間接性を含意するものではない。Fregeの意味論を採用したとしても、非記述的な、見知りをベースとした知識を考慮する余地は残されている。Russellが考えたような、見知りによる知識と記述による知識の基本的

な区別は維持されているのである。経験においてわれわれは対象を見知るのだが、これはそこにおいてわれわれが対象を見知るようなMoP(6)があるということとは矛盾しない。知識を二種類に区別することで導かれるのは、見知りのケースにおいては、あらゆるMoPが欠如していることではなく、記述的なMoPが欠如していることのみなのである。

ここにおいて MoP とは、対象が主体に与えられるその仕方であると言えよう。そのため、MoP には次の二種類があると考えられる。まず、非記述的な MoP は対象が主体に対して（直接的に）経験の内で与えられる仕方のことであり、一方、記述的な MoP は一様に具体化された性質を介して（間接的に）与えられる仕方のことである。つまり、Singularism における知識の二つの区別、すなわち見知りによる知識と記述による知識の区別は、Frege 的な意味論の枠内では、それぞれに対応する MoP の区別へと還元されることになる。かくして、Frege の誤算が明らかとなった。

3.2 改訂版 Descriptivism: 2-D Relational Descriptivism

前節では Russell 的な意味論ではなく Frege 的な意味論をとったとしても、Russell 的な知識の区別が維持できることを確認した。Recanati はこの方針で見知りに基礎を置く個別的思考の把握を説明していくのだが、その前に、Descriptivism をいかに洗練しても問題が生じてしまうという彼の議論を確認しておこう。

Recanati は改訂版 Descriptivism を二次元関係的 Descriptivism（以下、2DRD とする）と呼ぶ。少しテクニカルになるが、例えば “That cat is eating the food” のような個別的思考は次のように分析される。まず（1）思考する主体（あるいは、思考の心的現れ）、そして（2）主体（あるいは思考トークン）と他のいくつかの対象 y との関係 R、最後に（3）y について述べられた性質 P である。この事例だと、関係 R は次のような関係である。

> $(\lambda x)(\lambda y)$ [y は猫& x は y を見ている& 全ての z について、もし z が猫で x が z を見ているならば、そのとき $z=y$]

思考の最初の要素（思考する主体）が適用されると、それは性質（主体が見ている猫である、という性質）を与える。性質は、二つの側面を持つ枠組みの中で、指示対象、すなわち対象 y を決定する。そしてその対象が性質を持つか否かによって思考の真理値が決定されるのだ。

Recanati によれば 2DRD こそが最も洗練された Descriptivism とされるが、これにも二つの決定的な問題が残されているという。一つは、この枠組みでは、聞き手には話し手が何

を見て、それについて何を言っているかしか把握できないのである。つまり、聞き手自身がいかにして個別的思考を抱くかを説明できないのである。また、もう一つの問題としては、2DRD は見知りの関係を個別的思考の内容の一部として常に表現してしまうということがある。「アリストテレス」という語の言語や思考における指示対象を決定するのはアリストテレスにまで遡るコミュニケーションの連鎖であるが、固有名の使い手がその連鎖について考えている必要はないし、またその概念を把握している必要すらない。必要なのは、使い手がその連鎖の中に位置している、ということのみである。それを思考内容に含めてしまう 2DRD は、やはり理論として妥当なものではないと言わざるを得ないと思われる。

3.3　反見知り論者はいかにしてその標的を見誤ったか

Recanatiによれば、われわれが個別的思考を抱くのは、思考における単一の伝達手段を象徴することによってであるという。彼はそれを心的ファイルmental file(7)という考え方で説明する。3.1 で非記述的なMoPという概念を導入したが、それを具体化したものが心的ファイルである。例えば、モン=ブランという山（ケーキではない）についての心的ファイルは次のようになるとRecanatiは例示する（本書p. 159）。

モン=ブランファイル

<u>モン=ブラン</u>
・「モン=ブラン」と呼ばれている
・4000 メートルより高い
・ヨーロッパで一番高い
・エベレストより低い

ある対象について個別的思考を抱くということは、その対象との何らかの見知り関係に基礎を置く心的ファイルを活性化させることなのである。ここにおいて心的ファイルは、指示対象との関係を通じて得られた情報を貯蓄する役割を担っているのである。とはいえ、ここで言う「見知り関係」は、必ずしも実際的*de facto*である必要はない。規範的な(8)*de jure*ものであれば十分なのである。というのも、Russell的な見知りとは違って、心的ファイルは誤りうるからである。また、誤っていなくとも、同じ対象に対して異なる心的ファイルを抱くこともしばしば起こりうる。心的ファイルは各対象について決まったものが存在するようなものではなく、個々人の言語的知識や認知的状況によって無限に異なりうるものなのである。いずれにせよ個別的思考を抱くにはそのような心的ファイルがあれば十分だ。

よって、心的ファイルという考え方をとるのなら、反見知り論者の批判は当たらなくなる。というのも、彼らの批判は全て実際的な、すなわち Russell 的な見知りに向けられているからだ。そのような見知り関係も個別的思考の把握を可能にする要素の一部ではあろうが、全部ではない。よって、その批判を根拠に個別的思考の存在を否定することなど到底できないのである。

3.4 考察

以上、Recanati の議論を確認してきた。彼は Frege の意味論観を基礎とし、MoP という考え方を発展させ、その中でも、非記述的な MoP を心的ファイルというアイディアで具体化した。それによって Russell 的な見知りによらずとも個別的思考が可能であることを示し、従来の反見知り論者の批判が的外れであると指摘した。

このような Recanati の見解は、基本的には Bach と同じ路線にあるものと言えよう。というのも、どちらも Russell 的な見知りを否定するのではなく、それを別々のやり方で拡張するというアプローチを試みているからだ。ただ両者が最終的に提案する見解は全く逆方向にその拡張を行っているように思える。というのも、Bach が対象との外的な関係（事象的表象の連鎖）を提示したのに対し、Recanati は対象との内的な関係（心的ファイルへの情報貯蓄）を提示しているからだ。この対比は非常に興味深い。今後彼らがどんな議論を展開していくのか楽しみである。

4. おわりに

「思考と言語はいかなる関わりを持つのか」という問いかけは、言語哲学において伝統的なトピックの一つである。本書は、その中でも個別命題と一般命題をその内容として持つ、個別的思考と記述的思考の対比を一つのテーマとして、個別的思考を擁護する立場からの議論を提示している。個別的思考をどうやって特徴づけるべきか、やはりそれは Russell 的な見知りに頼らざるを得ないのか、あるいは Frege が言うようにそんなものは存在しないのか。個別的思考にまつわるこのような疑問は、思いのほかその根が深いものであるため、明確な回答を提示することは容易ではないだろう。しかし、言語と思考の関連性について明瞭な解答を与えてやるためには、その困難を乗り越えねばならない。本書は、そのように根源的で、それゆえ困難な個別的思考という概念について、多方面からのアプローチを試みた最初の書として、哲学的に価値の高いものであると評価できるだろう。

註

(1) “singular”は普通、「単数の」とか「特異の」と訳されるが、今回はどちらもそれほど適切な訳であるとは思えないので、その内容から考えて「個別的」と訳出した。

(2) これらの語は一般的には意味/意義と訳出されるものであるが、ここでは文脈から英語の訳をそのまま日本語で訳した。

(3) このように、Frege にとっての「意味」とは、ある種の「提示の仕方（mode of presentation, 以下 MoP と略す）」であったと言えるだろう。MoP という考え方は後に見る Recanati の見解において重要な役割を果たす。

(4) この訳は、廣松渉ほか（編）『岩波哲学思想事典』, 岩波書店, 1998 による。“*de dicto*”についても同様。

(5) ここで“”をつけているのは、事象的な仕方と記述的な仕方とでは、対象への関わり方が全く異なることを強調するためである。

(6) 註(3)を参照。

(7) 心的ファイルは言及されている対象の性質を記述したものを集めたものではあるが、Frege や Russell が主張したように、それによってその対象が置き換えられる訳ではない。何故なら、その対象について考えている際にそういった性質を記述したものについて思考している訳ではなく、その対象についての情報を、その対象について考える際に想起しているからである。心的ファイルを呼び起こすには、その対象について考えること、つまり個別的思考を抱くことが必要なのである。

(8) ここでいう「規範的な」とは「実際的な」と対比されて用いられている。つまり、Russell が言うように、本当の意味で見知り関係にある必要はなく、形式的に見知り関係と呼ばれる状態（それを見ているとか、それを聞いているとかという状態）にあればよい、という程度の意味である。

〔京都大学大学院修士課程・哲学〕